フェリス女学院大学日文大学院紀要　第二十二号　（二〇一五年三月）

浦沢直樹『20世紀少年』論
――顔のない少年たち

田中晴菜

序

浦沢直樹『20世紀少年』は、一九九九年から二〇〇六年まで『ビッグコミックスピリッツ』（小学館）にて連載された。また、完結編である『21世紀少年』は、二〇〇七年一月から七月まで連載された。第二十五回講談社漫画賞、第六回文化庁メディア芸術祭優秀賞、第四十八回小学館漫画賞、アングレーム国際漫画祭最優秀長編作品賞、第三十七回日本漫画家協会賞大賞、第三十九回星雲賞コミック部門等、数々の賞を受賞した。[1] また、二〇〇八年から二〇〇九年にかけて実写映画化され、全三部作として公開された。

物語は一九九七年、コンビニを経営しているケンヂが、お得意先の敷島教授宅で謎のマークを発見するところから始まる。そして、その敷島教授一家失踪事件をはじめ、幼馴染のドンキーの死、アフリカやロサンゼルスでの伝染病事件などが続く。ケンヂはそれらの事件が子どもの頃に書いた「よげんの書」の通りに起きていることに気づき、事件の背後にいる「〝ともだち〟」の存在へとたどり着く。

本論では、物語構造として、物語中の時間の流れ、登場人物の関係を明確にした上で、「顔のない少年たち」について論じていく。

作中、お面（覆面）をかぶり、顔がわからない人物が三人存在する。子どもの頃常にお面をかぶっており、周囲からいじめられていたサダキヨ、一九七〇年の万博に行く予定だったが行けなくなり、それを隠すために夏休み中サダキヨのお面を借りてかぶっていたフクベエ（第一の「〝ともだち〟」）、そして、フナの解剖実験の前日に死んでしまったとされるカツマタ（第二の「〝ともだち〟」）である。彼らは顔がわからないことで、アイデンティティの問題を抱えることになる。彼らのアイデンティティの問題における他者の影響について注目し、考察していく。

一　物語構造

（一）物語中の時間の流れ

物語中の時間の流れは、大きく四つに分けることができる。一つ目は、一九六八年から一九七三年までのケンヂの少年時代（小学五年生から中学二年生までが中心となる）、二つ目は、一連の事件が発生し始めた一九九七年から、二〇〇〇年の「血の大みそか」までの二十世紀末時代、三つ目は二〇〇一年から、二〇一四年に第一の「〝ともだち〟」であるフクベエが暗殺されるまでの第一の「〝ともだち〟」台頭時代、そして四つ目は、フクベエ暗殺後、カツマタが第

二の「〝ともだち〟」となった二〇一五年から「ともだち歴3年」（二〇一七年）までの第二の「〝ともだち〟」台頭時代である（【図一】）。

一つ目の少年時代だが、ケンヂたちが空き地に作った秘密基地、そして、その秘密基地で作られた「よげんの書」、一九七〇年に起きた首吊り坂の屋敷の肝試し事件、万博、一九七一年のドンキーが理科室の窓から飛び降りた事件など、過去の出来事が回想の形で現在（一九九七年から「ともだち歴3年」まで）の出来事の間に語られる。また、「〝ともだち〟ランド」のヴァーチャルアトラクション内で、「〝ともだち〟」の記憶として再現される。しかし、このケンヂたちの記憶と「〝ともだち〟」の記憶は不確実なものである。

一九九七年、一連の事件が発生した時に、ケンヂは「〝ともだち〟」のマークや「よげんの書」について、すぐには思い出すことができなかった。また、「〝ともだち〟ランド」のヴァーチャルアトラクション内では、首吊り坂の屋敷での肝試し事件は一九七一年の出来事となっているが、実際に肝試し事件が起きたのは一九七〇年である。「〝ともだち〟」であるフクベエは一九七〇年、夏休みの間万博に行くことになっていたが、行けなくなってしまった。万博に行っているはずの自分が肝試しに参加しているという矛盾を隠すため、ヴァーチャルアトラクション内では年代を変更しているのである。また、ヴァーチャルアトラクション内でのサダキヨのお面の下は、フクベエが少年時代のサダキヨの顔を知らないため、二〇一四年時のサダキヨの顔になっている。このように、登場人物たちの記憶として語られる少年時代の出来事は不確実なものである。しかし、この少年時代の出来事が「〝ともだち〟」の引き起こす一連の事件のきっかけとなっているのである。

二つ目の二十世紀末時代では、アフリカ伝染病事件を発端にケンヂたちが少年時代に作った「よげんの書」の内容が再現されていく。そして、三つ目の第一の「〝ともだち〟」台頭時代では、「よげんの書」にフクベエとヤマネが新たな内容を付け加えた「しんよげんの書」の内容が再現されていく。第二の「〝ともだち〟」台頭時代では、フクベエを暗殺し、「〝ともだち〟」に成り変わったカツマタが、「しんよげんの書」に更に付け加えた「かせいいじゅうけいかく」、「反陽子ばくだん」の実現へと向っていく。つまり、作中での時代を経るにつれ、「よげんの書」に沿って実現されていく内容は、ケンヂたちの作った内容の範疇を越えていくのである。

【図一】

	年代	主なできごと
少年時代	1968	「ジャリ穴」事件
	1969	原っぱに秘密基地作成
		ケンヂたちによって「よげんの書」が作成される
		フクベエによって「しんよげんの書」が作成される
	1970	ケンヂが「宇宙特捜隊バッヂ」を盗む
		カツマタが「宇宙特捜隊バッヂ」を盗んだと疑われ、死んだことにされる
		一学期にサダキヨが隣の学校から転校してくる
		万博開催
		夏休み　首吊り坂の屋敷の肝試し事件
		サダキヨが夏休み明けに転校する
	1971	原っぱのボウリング場建設により、秘密基地がなくなる
		理科室のオバケ事件
		タイムカプセルを埋める
	1973	「20センチュリーボーイ」が中学校で放送される
二十世紀時代	1997	伝染病事件
		敷島教授一家失踪
		ドンキー死亡事件
		タイムカプセルを掘りおこす
		「ともだちコンサート」が開催される
		クラス会
		羽田空港爆破事件
		カンナ誘拐未遂事件
	2000	ケンヂがテロリストとして指名手配される
		ケンヂが「9人の戦士」に招集をかける
		国会議事堂爆破事件
		「血の大みそか」
第一の〝ともだち〟台頭時代	2001	ケンヂ行方不明
	2014	カンナが上京する
		オッチョが「海ほたる刑務所」から脱獄
		キョーコが〝ヴァーチャルアトラクション〟に潜入
		新宿歌舞伎町教会での集会（カンナ暗殺未遂）
		サダキヨがキョーコを「〝ともだち博物館〟」に連れて行く
		老人ホーム襲撃事件
	2015（元旦）	「ひみつの集会」が行われ、フクベエがヤマネに暗殺される
第二の〝ともだち〟台頭時代	2015	「〝ともだち〟」の追悼式で「〝ともだち〟」が復活する（カツマタが「第二の〝ともだち〟」となる）
		万博開会式
	ともだち暦元年（2015）	万博開会式に来ていた人々に細菌兵器のワクチンが配られる
	ともだち暦3年（2017）	各地でデモが発生
		ケンヂが東京を目指す
		カンナが「ともだちタワー」に潜入する
		地球滅亡計画開始（「空飛ぶ円盤」で細菌兵器をばらまく）
		ケンヂ、小学校の校庭でカツマタに謝る
		カツマタ、「空飛ぶ円盤」の下敷きになり死亡
		ケンヂがヴァーチャルアトラクションに入る
		「反陽子ばくだん」事件
		事件収束後、ケンヂが再びヴァーチャルアトラクションに入り、「第二の〝ともだち〟」がカツマタであることが判明

また、作中での時代を経るにつれ、物語の中心となる登場人物も変化していく。二十世紀末時代では主にケンヂが中心となっているが、「血の大みそか」後、ケンヂは行方不明になってしまう。第一の「〝ともだち〟」台頭時代では、十七歳に成長したカンナ、「海ほたる刑務所」に収容されていたオッチョ、「〝ともだち〟ランド」に潜入しているヨシツネを中心に物語が進行していく。そして、ケンヂが再び登場するのは、第二の「〝ともだち〟」台頭時代以降である。この第二の「〝ともだち〟」台頭時代でも、ケンヂだけではなく、カンナ、オッチョなども中心人物となっている。次に、これらの登場人物の関係を整理しておきたい。

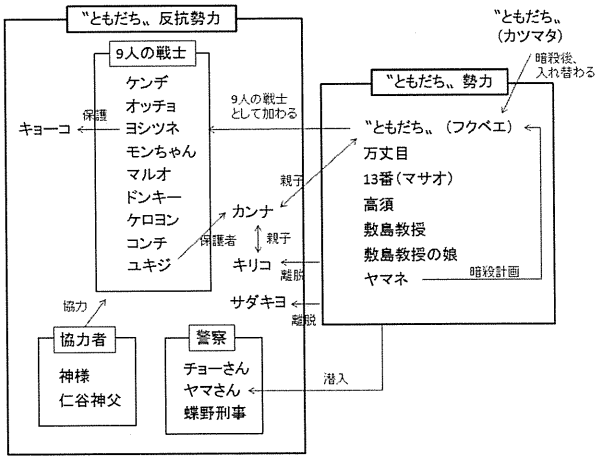
（二）登場人物の関係

登場人物の関係としては、まず、大きく「〝ともだち〟」勢力と「〝ともだち〟」反抗勢力に分けることが出来る（【図二】）。

「〝ともだち〟」勢力としては、第一の「〝ともだち〟」であるフクベエ、第二の「〝ともだち〟」であるカツマタ、友民党の代表である万丈目、「〝ともだち〟」の側近でありスナイパーである「13番」（マサオ）、同じく側近であるドリームメーカー高須、巨大ロボット制作に関わった敷島教授と、その敷島教授の娘などがあげられる。

そして、「〝ともだち〟」反抗勢力として、まず「よげんの書」に書かれた「9人の戦士」である、ケンヂ、オッチョ、ヨシツネ、モンちゃん、マルオ、ドンキー、ケロヨン、コンチ、ユキジがあげられる。そして、ケンヂの姪であるカンナ、カンナの同級生であり、ヨシツネに保護されたキョーコ、ケンヂたちの協力者である「神様」や仁谷神父、警察関係者のチョーさん、そのチョーさんの孫である蝶野刑事などが登場する。また、「〝ともだち〟博物館」の館長だったが、「〝ともだち〟」に反抗し、単独で行動するサダキヨ、カンナの母であり、細菌兵器を開発してしまったことを後悔し、ワクチンを作るために行動しているキリコ、同じく細菌兵器を開発していたが、二〇一四年の大みそかに「〝ともだち〟」（フクベエ）を暗殺しようとするヤマネなど、「〝ともだち〟」勢力から抜ける、あるいは「〝ともだち〟」勢力内から「〝ともだち〟」に反抗していく人物も存在する。その一方、「〝ともだち〟」の正体に気づいた警察官のチョーさんを殺害したヤマさんなど、「〝ともだち〟」反抗勢力の中に「〝ともだち〟」勢力の人物が潜入していることもある。フクベエ自身も二十世紀末時代では「9人の戦士」の一人として、ケンヂたちの仲間に加わっていた。

ここまでの物語中の時間の流れ、登場人物の関係を踏まえ、サダキヨ、フクベエ、カツマタについて考察していく。



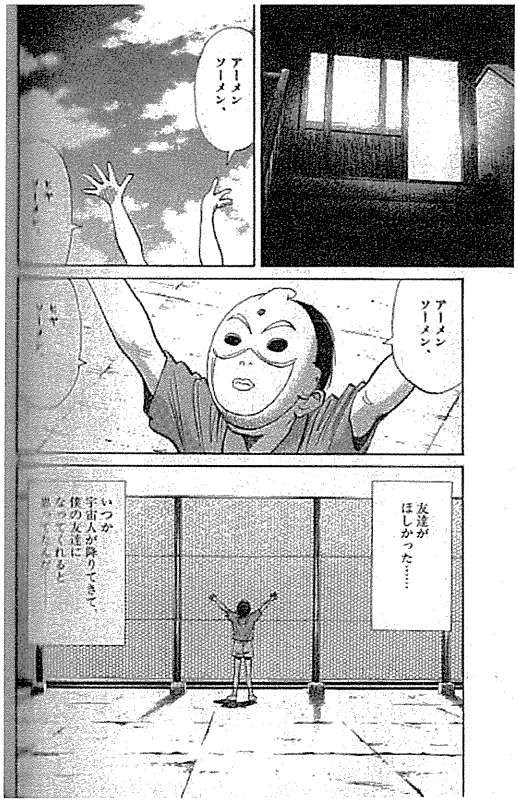
【図二】

二　顔のない少年たち

（一）サダキヨ

サダキヨは一九七〇年、小学五年生の一学期にケンヂたちの学校に転校してきた。そして、お面をかぶり、学校の屋上で「アーメンソーメン、ヒヤソーメン」と唱えながら「宇宙人と交信」していた（【図三】）。サダキヨのかぶっているお面は「ナショナルキッド」のお面である。「ナショナルキッド」とは、一九六〇年から一九六一年に放送された東映製作の特撮番組、およびその特撮番組に登場するヒーローのことである。「ナショナルキッド」は三万光年彼方のアンドロメダからやってきたという設定で、地球では科学者の旗竜作に姿を変えて活動している。「友達がほしかった……いつか宇宙人が降りてきて、僕の友達になってくれると思ってたんだ……」と語るサダキヨにとって、アンドロメダからやってきたという「ナショナルキッド」のお面をかぶるという行為は、「友達（友人）がほしい」という願望の表れだと考えられる。

しかし、サダキヨは「友達がほしい」と思っていながらも、周りの子どもたちからいじめられていた。そして、サダキヨは小学五年生の夏休みの終わりに転校している。中学生になった時には、サダキヨは小学五年生の時の同級生から「死んだ」とされ、「いない人間」となっている。ここで、中学生の時のサダキヨはお面をかぶっていないことに注目したい（【図四】）。小学生の時、サダキヨはお面を



【図三】（『20世紀少年』10巻　第9話）

【図四】（『20世紀少年』10巻　第10話）

かぶっていたことで、「サダキヨはお面をかぶっている人物である」と周りから知覚されている。そしてそれは、「お面をかぶっている人物はサダキヨ」であるという知覚に繋がる。これは、フクベエがサダキヨのお面をかぶって外出した際、周りの子供たちからサダキヨだと思われていじめられるという場面からも、「お面をかぶっている人物はサダキヨ」だと周りから知覚されていることがわかる。つまり、お面をかぶっていない素顔のサダキヨはサダキヨだと知覚されないのである。

他者からの知覚と自己の同一性の知覚について、エリクソンは次のように指摘している。

そもそも、一つの人格的な同一性 personal identity をもっているという意識的な感情 conscious feeling は、同時に行われる二つの観察に基づいている。つまりそれは、時間的な自分の自己同一 self-sameness と連続性 continuity の直接的な知覚と、他者が自己の同一性と連続性を認知しているという事実の同時的な知覚である。(2)

アイデンティティの確立のためには、自己の同一性の知覚とともに、他者からも自己の同一性が知覚される必要がある。つまり少年時代のサダキヨは、エリクソンが指摘するところの「他者からの自己の同一性の知覚」が欠如している状態なのである。

二〇一四年、第一の「〝ともだち〟」台頭時代のサダキヨは、カンナとキョーコが通う都立新大久保高等学校に英語教師として赴任する。そして、「〝ともだち〟ランド」のヴァーチャルアトラクションで「〝ともだち〟」の正体に近づいてしまったキョーコを保護する目的で、サダキヨ自身が館長を務める「〝ともだち博物館〟」に連れて行く。しかし、キョーコを保護していることが発覚し、高須ら「〝ともだち〟」勢力の襲撃を受ける。そして、キョーコとともに「〝ともだち博物館〟」から逃げ出し、小学生時代の担任であった関口先生を訪ね老人ホームに行く。関口先生は、誰も覚えていない、写真にも写っていないと思われていた少年時代のサダキヨの素顔の写真を持っていた。また、老人ホームに駆けつけたカンナからは、ケンヂの話を聞く。小学生の頃、ケンヂは超能力ではなく力ずくでスプーン曲げをしようとした時、サダキヨに「ズルはダメだよ」と言われたことを覚えていた。

サダキヨは「僕の記憶はみんなの頭から完全に消え去り、二度と僕を思い出すこともない……」と思っていたが、関口先生やケンヂはサダキヨのことを覚えていた。この時、サダキヨの「自己の同一性の知覚」と「他者からの自己の同一性の知覚」が一致したということである。この場面から、自己の同一性がいかに他者からの影響を受けているか、うかがうことができる。

また、サダキヨは老人ホームの場面で、モンちゃんを殺害したことを告白する。この時、サダキヨは「僕はいい者だ」と繰り返し言っている。そしてそれ以来、サダキヨは自分が「いい者」なのか「悪者」なのか、疑問を持ち続けていく。サダキヨは「ともだち歴3年」の「地球滅亡計画」の際、小学校の校庭で第二の「〝ともだち〟」であるカツマタを止めた時、ケンヂに自分は「いい者」だったか、仲間になれたかと問いかける。サダキヨにとって、他者から「いい者」である、仲間であると認められることが重要なのである。

また、ここでの「いい者」とはケンヂたち「〝ともだち〟」反抗勢力のことであり、「悪者」とは「〝ともだち〟」勢力のことだとされ

ている。しかし、「よげんの書」や「しんよげんの書」の存在を知らない人々にとっては、「〝ともだち〟」勢力が「いい者」であり、「〝ともだち〟」反抗勢力が「悪者」とされている。また、カツマタはケンヂのことを「悪の大王だ」と言っている。これはケンヂが少年時代に「宇宙特捜隊バッヂ」を盗み、カツマタが「死んだ」ことにされた原因を作ったためである。ケンヂは、カツマタにとっては「悪者」であるということができる。つまり、「いい者」なのか「悪者」なのかは、個人の認識、あるいは集団の認識次第で入れ替わってしまうのである。

（二）フクベエ

一九六九年、小学五年生の時に、フクベエはケンヂたちの秘密基地に入り込み、サダキヨとともに「よげんの書」を読む。その時から、フクベエはサダキヨに自分のことを「〝ともだち〟」と呼ばせるようになる。「自分でつけた名前」に関して、ストラウスは次のように指摘している。

自分でつけた名前は、名前と自己のイメージとが分かちがたく結びついていることをさらに明確に物語っている。改名は、通過儀礼を示すものである。それは、その人が自分をある種の人間として表象していると思える名前をもちたがっていることや、自分がもう以前の名前が表していたような人間ではないことを望んでいることを意味している。[3]

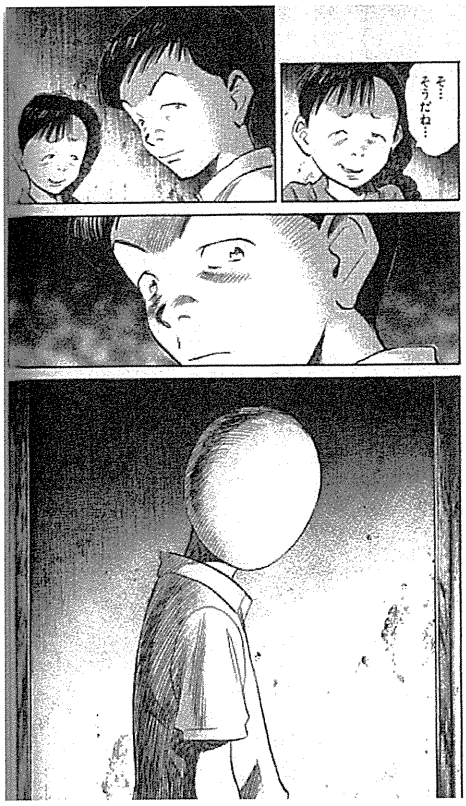
「フクベエ」というケンヂたち同級生の間のあだ名で呼ばれていた彼は、秘密基地や「よげんの書」の仲間に入ることはできなかった。そして彼は、ストラウスの指摘するように「自分がもう以前の名前が表していたような人間ではないことを望」み、「自分をある種の人間として表象していると思える名前」、つまり「〝ともだち〟」という名前で呼ばれることで、「友人」という表象をもつことを望んでいたと考えられる。

そして、フクベエは一九七〇年の万博の話でケンヂたちの注目を集めることになる。フクベエにとっての万博とは、ケンヂたち同級生の注目を集め、話題の中心人物になるためのものであった。しかし、フクベエは一九七〇年の夏休み中、大阪の親戚の家に泊まり、万博に行くことになっていたが行けなくなってしまった。そこで、万博に行っていないことを隠すために、夏休み中、サダキヨのお面をかぶって過ごすことになる。そして、漫画を買うために外出した際、お面をかぶっていたことでサダキヨだと思われ、子供たちからいじめられてしまう。サダキヨのお面をかぶっていることで、フクベエは周りの子供たちからフクベエだと知覚されない。これは、首吊り坂の屋敷の肝試しに行った時も同様である。ケンヂたちが肝試しのために集まった際、その場にいないマルオやケロヨンの名前は挙がるのに対し、その場にいるフクベエの名前は挙がらない。さらに、フクベエは万博に行っていることになっているが、ケンヂたちはそのフクベエがここにいることに疑問を感じていない。つまり、ここでもフクベエは周りから知覚されていないのである。

また、鏡に映るフクベエの顔が「のっぺらぼう」のようになっている場面が物語中で二箇所ある。サダキヨのお面をして外出し、いじめられた時（【図五】）と、首吊り坂の屋敷にテルテル坊主を仕掛けた時（【図六】）である。

先述した通り、サダキヨのお面をして外出した時、フクベエはフ

【図五】（『20世紀少年』16巻　第2話）



【図六】（『20世紀少年』16巻　第3話）

クベエだと知覚されていない。また、首吊り坂の屋敷にテルテル坊主を仕掛けた時、フクベエは「これでやっと取り返せる。僕の夏休み……」、「僕たちが作ったテルテル坊主に驚いたんだ。（中略）これで大騒ぎだ。明日から町中大騒ぎだ」と、自分が作った仕掛けで首吊り坂の屋敷が注目を集めることに期待している。しかし、フクベエは万博に行っていることになっているため、仕掛けを作ったのが自分であると公言することはできない。つまり、仕掛けを作ったのは確かにフクベエでも、周りからは仕掛けを作ったのがフクベエであると知覚されることはないのである。そして、このように周りから知覚されないという事態が起きた時に、フクベエは「のっぺらぼう」になるのである。

また、フクベエはテルテル坊主を作った際に、「顔とか書いたほうがいいんじゃないかな……」と言うサダキヨに「いいんだよ。顔がないのが一番怖いんだ」と言っている。フクベエは自分の顔が「のっぺらぼう」のようになっているのを見る時、「怖い」と感じているのである。つまり、フクベエは他者から知覚されないという状況を「怖い」と感じているのである。

そして、フクベエは「のっぺらぼう」の顔を見た後、鏡に映った自分の顔（「のっぺらぼう」になっていない自分の顔）を確認し、「君は誰だ？」と問いかける。サダキヨのお面をして外出し、いじめられた後（【図七】）と、首吊り坂の屋敷の肝試しにケンヂたちと一緒に行った後（【図八】）の二箇所である。

鏡の中の自分に「君」と呼びかけているということは、鏡の中の自分を「他者」として見ているということである。ストラウスは、「他者を通して自分がどのように見られているか予期する」と指摘して

【図七】（『20世紀少年』16巻　第3話）

【図八】（『20世紀少年』16巻　第5話）

いる。

自己評価において、他者の反応が考慮されなくてはならないことは明らかである。あなたの行いが、それに順次反応する他者たちにどのように見えているかを予期するとき、あなたは自分の未来の行いをある種の複雑な鏡の中で見ている。

それぞれ互いに、鏡は通り過ぎし他者を映し出す。[4]

（傍点原著者）

ここでのフクベエはまさに他者からどのように見られているかを、鏡を通して予期しているのである。この「君は誰だ？」という問いかけは、他者から見て誰だかわからないという状況を表している。そして、それは「他者からの自己の同一性の知覚」の欠如を示しているのである。また、首吊り坂の屋敷での場合に、鏡が割れていることにも注目したい。鏡に映ったフクベエの顔は、鏡の亀裂が入った状態で描かれている。この場面では「他者からの自己の同一性の知覚」の欠如を描くとともに、フクベエ自身も自分が誰だかわからないという、「自己の同一性の知覚」の崩壊も示していると考えられる。

ここで、「しんよげんの書」と「〝ともだち〟ランド」のヴァーチャルアトラクションについて考察していきたい。一九七〇年の夏休み明け、フクベエはヤマネとともに「しんよげんの書」を作る。しかし、フクベエがケンヂたちの「よげんの書」を「マネ」して「しんよげんの書」を作ったとしても、ケンヂたちの仲間に入って一緒に遊ぶことはできていない。そこでフクベエは、ケンヂたちと一緒に「よげんの書」を作って遊ぶために、「よげんの書」を再現した一連の事件を起こし、「9人の戦士」のひとりとしてケンヂたちの仲間

に入り込んだのである。「9人の戦士」のひとりとして他者から知覚されることで、「9人の戦士」になろうとしたのである。

また、「しんよげんの書」は「よげんの書」を「マネ」して作られたもの、つまり複製である。この点において、「〝ともだち〟ランド」のヴァーチャルアトラクションも、フクベエの少年時代の記憶を複製したものである。しかし、この記憶はヴァーチャルアトラクション内で再現される際に、フクベエにより改編されている。ヴァーチャルアトラクション内では首吊り坂の屋敷の肝試し事件は一九七一年の出来事とされているが、実際に起きたのは一九七〇年である。これはフクベエが一九七〇年の万博に行っていないということを隠すための嘘であった。つまり、ヴァーチャルアトラクションでは、フクベエの視点で、フクベエの都合のよいように少年時代の記憶を描くことができるのである。また、キョーコが体験したように、ヴァーチャルアトラクションは、他者にフクベエの少年時代の記憶を体験させることができる。そして、フクベエによって改編された記憶が真実であるかのように、他者に知覚させることができるのである。

先述したように、フクベエは「他者からの自己の同一性の知覚」の欠如により、「自己の同一性の知覚」の崩壊を起こした人物であるとともに、「他者からの自己の同一性の知覚」を利用することにより、「9人の戦士」のひとりという「自己の同一性の知覚」を作り上げた人物なのである。

（三）カツマタ

第二の「〝ともだち〟」であるカツマタだが、物語中その名前は「フナの解剖実験の前日に死んじゃったカツマタくん」と、すでに死んでいることが前提で語られている。彼が「死んだ」とされたのは、駄菓子屋で「宇宙特捜隊バッヂ」を盗んだと疑われたことが原因である。実際には、バッヂを盗んだのはケンヂであり、カツマタは「当たり」を引いてバッヂを引き換えたのである。カツマタは「僕はやってない」と抗議したが、フクベエが「こんな悪いことしたんじゃ死刑だな」「おまえは今日で死にました」と言ったことにより、この事件以降「死んだ」ことにされてしまう。こうしてカツマタはサダキヨと同じように、しかしサダキヨよりも早い段階で「死んだ」ことにされ、「いない人間」になったのである。

ここで、小学生時代のカツマタについて、キリコがカツマタだと思われるお面の少年を目撃していたことに注目したい。（【図九】）この時点ではカツマタは「死んだ」ことになっているため、フクベエとヤマネはお面の少年をサダキヨだと思って話をしている。

そして、一九七〇年の夏休みが終わり、新学期になると同時にサダキヨは転校している。しかし、理科室でフクベエとヤマネが話をしている時、お面の少年が入ってくる。（【図十】）フクベエとヤマネはサダキヨだと思っているが、サダキヨは転校後、中学二年生になるまでこの町に一度も戻ってきていない。つまり、この時のお面の少年はカツマタだと考えられる。カツマタはサダキヨが転校した後、完全にサダキヨと入れ替わっているのである。そして、一九七一年のドンキーが理科室の窓から飛び降りた事件でも、フクベエとヤマネとともに理科室にいたのはカツマタである。

また、カツマタは二〇一五年の元旦にフクベエがヤマネによって暗殺されたあと、フクベエに成り代わり、第二の「〝ともだち〟」となる。「〝ともだち〟」の追悼式の際、「〝ともだち〟」は「復活」する。

【図九】（『20世紀少年』20巻　第11話）

しかし、これはカツマタによる「イエス・キリストの復活」を模倣した入れ替わりのための演出である。この演出により、第二の「〝ともだち〟」は「神」となる。このような入れ替わりが可能となるのは、入れ替わる対象がお面、または覆面をかぶっているからである。

先述したように、「サダキヨはお面をかぶっている人物である」ということから、「お面をかぶっている人物はサダキヨ」となる。また、「〝ともだち〟はマークが描かれた覆面をかぶっている人物である」ということから、「マークが描かれた覆面をかぶっている人物は〝ともだち〟」となる。中身が入れ替わっても、お面や覆面によって周りの人々から「〝ともだち〟」として知覚される。つまり、他者からの知覚によって、入れ替わる前と入れ替わった後の人物が同一

【図十】（『20世紀少年』16巻　第5話）

化されてしまうのである。

高須は「〝ともだち〟」が入れ替わっていることに気づきながらも、「誰でもいいのよ」「今そこにいるのが〝ともだち〟」と言っている。高須にとって重要なのは「〝ともだち〟」という象徴なのである。また、高須は「〝ともだち〟」の子供を妊娠しており、「〝ともだち〟は、永遠に生きる方法を手にしたの」と言っている。「永遠に生きる方法」とは子供を妊娠したことによって「〝ともだち〟」の血が続いていくという意味とともに、「〝ともだち〟」という象徴によって、入れ替わる前と入れ替わった後の人物の同一化を永遠に繰り返していくことができるということを表しているのである。

結

『20世紀少年』という作品が読まれる際に、注目されるのはやはり「〝ともだち〟」の正体だろう。二〇〇八年から二〇〇九年にかけて映画化された際も「〝ともだち〟」の正体は誰かという謎に焦点が当てられていた。しかし、フクベエとカツマタの入れ替わりが描かれている通り、「〝ともだち〟」という存在には実体はなく、象徴なのである。高須の言うように、「〝ともだち〟」は「誰でもいい」のである。

本論では、サダキヨ、フクベエ、カツマタの三人に注目したが、「自己の同一性の知覚」と「他者からの自己の同一性の知覚」の問題は、その他の登場人物たち、誰にでも起こりうる問題なのではないか。

そして、このような「自己の同一性の知覚」と「他者からの自己の同一性の知覚」というアイデンティティの問題は、前作『MONSTER』にも描かれている。『MONSTER』ではヨハンという人物が登場する。彼は「何者かわからない」人物であり、『20世紀少年』の「〝ともだち〟」と通じる。

浦沢直樹は毎日新聞のインタビューで「だれもが抱える心の闇が実はよく分からない。人間はその根源がどこにあるかずっと探している。そんな人間の織りなすドラマが描きたかった」と語っている。[5] この「根源」として、アイデンティティの問題が存在しているのではないだろうか。

そして、このアイデンティティの問題は作品を経るにつれ、深刻化している。『MONSTER』のヨハンは自分の本当の名前を知らず、自分が何者かわからない、そして、他者からも何者かわからない人物である。一方、『20世紀少年』のフクベエやカツマタは当初、自分が何者であるかはわかっている。しかし、他者から自分ではない存在だと知覚されることで、自分が何者かわからない状況に陥ってしまう。このように、『20世紀少年』では「自己同一性の知覚」が「他者からの自己同一性の知覚」の影響をより強く受けているのである。アイデンティティを形作る存在であると同時に、アイデンティティを脅かす存在である「他者」が「〝ともだち〟」を生み出すのである。

また『20世紀少年』では、ヴァーチャルアトラクションの問題や、カツマタによる「〝ともだち〟」の入れ替わりなど、様々な問題が複合化した形で描かれている。浦沢直樹作品は、アイデンティティの問題を深刻化、複合化させながら描き続けているのである。

※テキストは、全て浦沢直樹『20世紀少年』コミックス全二十二巻（二〇〇〇年三月一日～二〇〇七年一月一日　小学館）、浦沢直樹『21世紀少年』コミックス上下巻（二〇〇七年六月一日～二〇〇七年十月一日　小学館）による。

【註】

（1）『CasaBRUTUS特別編集　浦沢直樹読本』二〇〇九年十月一日　マガジンハウス

（2）エリク・H・エリクソン『「自我同一性」アイデンティティとライフサイクル』一九七三年三月二十五日　誠信書房

（3）A・L・ストラウス『鏡と仮面――アイデンティティの社会心理学』二〇〇一年三月十日　世界思想社

（4）同前

（5）「『MONSTER』『20世紀少年』…ふたつの闇を描く　漫画家・浦沢直樹氏に聞く」二〇〇二年二月一日　毎日新聞　東京夕刊